

ヘッセの再検討に寄せて

藤 井 啓 行

1950年に当時64才になっていたゴットフリート・ベンは、その時73才の作家ヘルマン・ヘッセを目して、発展小説を書き、また夫婦関係や内面性の問題などを扱うごく普通の小説家であり、典型的にドイツ的と言ってよい一事象と考えたのであった。当時のベンは、それまでの10年にも及ぶ沈黙を破り、軍医として第二次大戦に従軍した折の、精神的な環境から完全に隔絶され、孤独の世界に置かれた自己を徹底的に凝視した作品を次々に発表して、たちまち大きな反響を呼ぶところとなった。ナチス時代には民主主義者や共産主義者、また亡命者からも精神的淫売・変節漢などと激しく非難をうけたその名前も、一躍ここで世界的なものとなるに至り、彼は戦後の詩人たちに強い影響を与える存在となっていた。

ところで、ヘッセの作品がドイツにおいて大きくクローズ・アップされたのは、この時までには3度あった。それはつまり、1904年に彼が「ペーター・カーメンツィント」をもって華々しく作家生活のスタートを切った折、次に、第一次大戦直後「デーミアン」を発表して世人に深い感銘を与えた際、そして第二次大戦が終了して程なく、殊に「ガラス玉遊戯」などによって彼がノーベル文学賞を授けられた時である。ドイツにおけるヘッセに対する世評の変転には、かなり目まぐるしいものがあるが、今次の大戦後5年にしてすでに、上述のベンの意見の表明において、ヘッセに寄せる衆評の漸次の後退が集約して認められるようにも、私としては感じざるを得ない。

もっともこのベンの発言は、「ベトラハトゥンゲン」の中に収められた「選集に対する一作家の序」(1921)と題する一文において、44才のヘッセ

自身が述べている言葉¹⁾をまさしく想起させるものでもある。これは、彼がそれまでに書いた小説の中から、自ら拾って一般読者向けの選集を作るようにという或る出版者の懇請に対し、この選集を編むための立脚点として自分には二つの態度が可能だが、その一つは、自分自身の作品を他の、すでに価値が定まっている謂わば証明済みの作家たちのそれと比較し、それを自己批判の尺度にすることだとして、次に続けているところの一節である。すなわち、「外見的に言えば、私の長篇小説は前の時代における作家たちの作品と比較できる。お互いの共通点は、〈長篇〉とか〈小説〉とかいう書物の扉の表示である。しかし本当は、——私は内心ぞっとして、今あまりにも明らかになったのだが——私の小説は小説ではない。私は小説家でない。小説家では全然ないのだ。……自我感情および世界感情を表現しようとする詩的な試みに貼り付けた、借りもののレッテルとしての長篇小説、これこそドイツ文学特有、ロマン主義特有の現象で、この点において私は自分がその血をひき、その罪を共にしていることをよく認めたのであった。」²⁾

字面に表われているそのままは別としても、少なくとも上の言葉の中に含まれている一種自嘲めいた響きだけは、それはそれとして率直に受け取ってゆくのが、ヘッセを読む者の自然な姿勢であろうと思われる。³⁾ だがその時点から30年も経過した1950年においても、一体ヘッセの本質はそれほど変わりばえがしないのであろうか。

さてベンのある言明のあとに続いて、1957年に、当時33才の若い文芸評論家カールハインツ・デシュナーが、ヘッセの作品にきわめて辛辣な論評を加えた。デシュナーは、「文学的論難書」としてのその著「きわもの、因襲、ならびに芸術」⁴⁾の中で、そのヘッセ否定の立場を鮮明にしている。彼はそこで、ドイツ国民の愛好する作家をあえて酷評するという明確な意図をもって、カロッサ、ヴィーヘルト、ベルゲングリューン、ピンディング、エルンスト・ユンガーなどと共に、ヘッセにも相当に多くの頁

数を割いているのである。ここで彼の批判の対象になったのは専ら作品の表現方法、文体であり、この観点から彼は、抒情詩を始めとするヘッセの作品の多くを、とりわけ小説「ナルチスとゴルトムント」を、単に伝統的な手段によって作りあげられた亜流のものに過ぎず、Kitsch だと断じた。このセンセーショナルな書物は、その発表の直後から翌年にかけて、数々の問題を投げかけてジャーナリズムを賑わし⁵⁾、これに対する反駁の声も少なくなかったのだが、結果としては、その後のヘッセ評価に一つの大きな方向づけをすることにもなった事実は、どうやら否めないようである。そして、おそく見積ってもこの時以来、西ドイツのいわゆるインテリの間では一般に、ヘッセを軽蔑するのが趣味のよいこととされてきたらしい。そしてこの風潮は当然、日本のドイツ文学研究者のヘッセ受容の態度にも、強く働きかけたことが思い合わされる。ちなみに、従来は単行本形式で出されてきた彼の作品は、それらに新たなものも加え、ヘッセ生誕75年の記念に、出版社ズールカンプにより初めて6巻の著作集にまとめられたが(Gesammelte Dichtungen, 1952)、これは更に5年後ちょうどこの1957年に、作者80才の記念として増補され、7巻の作品集となった(Gesammelte Schriften)。そしてその後はやや長い年数を措いて、新しい構成に基づく第二段階のいわゆる全集(もちろんその中に、ヘッセの作品がすべて収められているわけでは決してないが)として、1970年に同じズールカンプから、12巻の Gesammelte Werke が出された。

さて先のベンの明言後10年、かつてはヘッセの作品の翻訳点数にかなりの欠落が見られた英語圏の国アメリカにおいて、突如ほとんど爆発的に「奇妙な」現象が見られるに至った。すなわち、若者の「ドイツ化」現象だが、それも殊に、“The Yale Review”によれば、二人のドイツの著作家もっぱら関心の対象となり、彼らがアメリカの青年の心を特に強く引き付けているのである。その一人はヘルバート・マルクーゼだが、いま一人は、ドイツではその間にあって、政治に関心なくまた芸術家としては亜

流であるとの烙印を押された作家、他ならぬヘルマン・ヘッセなのであった。そして彼こそは、とりわけ若者にとっての奇蹟的な存在になったと言われる。

では、ヘッセの何が彼らの心をそれほどまでに強く捉えたのか？—“LIFE-Book Review”や“Times Union-Rochester New York”などによれば、ヘッセは常に若者の側に立って若者の言葉を話すのであり、たえず不毛の権力に抗うヘッセの主人公と自らを同一化することによって、若い世代が、自己をもはや鎖に繋がれているとは感じなくなるからである。1962年にヘッセが亡くなったあと、彼は最初むしろアメリカのヒッピーたちの奇異な偶像であり、新しい一つの麻薬のようにさえ見えた。たとえば、あるアメリカの空軍の飛行士が、ヘッセを読んだあと直ちに軍隊を去り、公然たる平和主義者としてベトナム戦争の反対者になった、というような事例も見うけられる。

しかし、このようなヘッセへの傾斜は、単に青年の間にだけ認められたことではなく、たとえば現代アメリカ文学の中にあって第一級の気品と風格を持つソーントン・ワイルダーは、ヘッセの精神は自分にとって一つの世界であると熱烈にたたえ、また一方では発禁本の猥褻作家でありつつ、他方では現代の聖者、世紀の大詩人とも称されるヘンリー・ミラーは、ヘッセの「シッダルタ」の中に偉大な福音を読み取り、これを大好きな作品として推奨した。さらに、1970年にアメリカでヘッセの「ガラス玉遊戯」の新しい翻訳が現れた時、“New York Times”の文学欄は、この書物の批評に寄せて、ヘッセの「再発見」の波はいまや一大奔流にまでなったと述べている。その間において、ヘッセはこの国にあって100年このかた最も多く読まれたヨーロッパの作家となった。100人に1人のアメリカ人が、廉価で手にはいることも働いていようが、とにかく彼の本を買うという。デシュナーの評価とは正反対に、ヘッセの文体の素朴な単純さはカフカのそれと同じようにただ外面上だけのことで、本当は内面の充実による

極度に錯綜したものであると受け取られ、そのことをも踏まえた彼の人気は、アメリカの諸大学におけるヘッセの特別演習にも及んだ。他のいかなるドイツの作家についても、最近の数年間において、ヘッセに関してほど多くのドクトル論文が書かれたことはないという。その点では、今日ヘッセを本格的に研究するためには、夥しい量の英語による文献を読むことも必須の条件とさえなった。このようにまずアメリカで始まった所謂ヘッセ・ルネサンスの波は、そののち更に中・南米やソ連、またフランスなどにも押し寄せ、次第に関心の高まりを見せているようである。そのためドイツのヘッセ研究者の中には、それらの国々から出る文献も直接読む必要を感じ、さらには、従来ヘッセの愛読者が日本には殊に多いという実情から、日本語で出される資料にも眼を通すことが大いに望まれるとして、日本語の習得まで必要だと本気で考えている人さえ現れているのである⁶⁾。

ところで西ドイツでは、海外におけるこのような現象は、つい先ほどまで、一般的にはむしろかなり奇妙なものと感じられてきたようである。いや今でも、本質的なところでは、この事情はさほど変わっていないのかも知れない。ほんのしばらく前のことになるが、ヘッセを愛し、強い関心を持って研究する何人かの真摯なドイツ人たち⁷⁾の口から私は直接、自分らはまだドイツ（やスイス）では多少とも変わり者で、或る意味では異端者です、というような言葉を聞いた。こんな時に私は、日本における平均的な愛好者の思い描くヘッセの像と、その母国で、特に積極的に文学に関わりを持つ人々の多くが彼について抱くイメージとの間には、かなり大きな隔たりがあることを、事新しく実感せざるを得ないのである。つまり彼らにとってのヘッセは、その体内にロシアの血が半ば近く流れ、祖国を離れ郷里にも帰らず、2度の大战に反対しつつしかも積極的な政治行動にはいっさい関係せず、ルガーノ近辺の人里離れた丘の上に一スイス人として、ただ自然を友とし、自分の小さい世界の中のみ「純粋に」生きたマイナ

一・ポエトといった存在ですらあるのではないか、と思われる。これらの人々にしてみれば、アメリカの連中は、よりもよって、西ドイツではもはや殆んど読まれず、まして真剣に取り上げることなど思いもよらない作家を「発見」した、というわけでもあろうか。

しかしそうは言いながらも、実はこの新しい波はついに西ドイツにもはいつてはきたのである。特に「シッダルタ」と「荒野の狼」とは、書店は再びかなりの部数を店頭において、顧客の要求に応じざるを得なくなった。そして1968年には、ヘッセとトーマン・マンとの往復書簡集が新たにズールカンプから刊行され⁸⁾、一部の批評家はヘッセについて更めて深刻に考えはじめた。この書簡集は、しばしば「モンタニョーラの庭師」と蔑まれたヘッセが、世間の通念ではきわめて政治的と思われるマンよりも、政治的情勢に対して実は決定的に明確な見とおしを持っていたことを示してくれるのである。ヘッセは、たとえばワイマル共和国の終局とナチの勝利とを、マンがなお心を安んじてドイツの未来に明るい期待を寄せていた時点に、すでにはっきりと予感していた。

第一次世界大戦勃発の1914年以来すっかり懐疑的になったヘッセには、本当に晴朗な日に楽観的な望みを託する気持はもはやなくなっていた。1968年に「政治的人間ヘッセの出現」について訝しんだ評論家たちは、実は彼の悪い読者であったか、または極く不十分な記憶力しか持ち合せていない人々であったという他ない。何故ならば、ヘッセの政治的な論文は、第二次大戦後一般の人々の手にも広く行きわたることとなり、1946年「戦争と平和」(1914年以来の、戦争と政治に対する論文・随想)と題する書物にまとめられて⁹⁾、その後も版を改めつつ出続けているからであり、彼の思想の核心はその中でよく読み取れるためである。この本の中に、「車輪の下」や「ロスハルデ」の作者として世に知られ、もてはやされたヘッセが、生まれて初めて公然と政治的な所信を、やむにやまれぬ気持から表明したあの論文「おお友よ、そのような調子をやめよ！」も見いだすこと

ができる。この文は上の書物の冒頭に収められているもので¹⁰⁾、開戦の2カ月後1914年9月に執筆され、はじめ「新チューリヒ新聞」に掲載された。当時ヘッセは、1912年以来スイスのベルン近郊に住んでいたのである。

戦争が始まるまでは、ヘッセは周囲の世界とまざまざ平和に暮してきた。1904年に刊行した小説「ペーター・カーメンツィント」によって一挙に有名になり、その後の彼は謂わばブルジョア階級お気に入りの作家であった。金にも世間的な名声にも欠けるところがなかった。ドイツの新聞や雑誌はあらそって彼を迎えた。そして訪れたのが1914年の大戦勃発である。この間の事情については、1925年ヘッセが48才の時に発表した自伝的な素描「短い履歴」によっても、直接おおよそ知ることができる¹¹⁾。

すなわち、戦争を契機として彼の内外の事情は一変し、それまでの平和も幸福も、実は極めて不安定な基盤の上に立っていたことが痛感されるに至った。世界には、殺戮の手段は知っていても、魂の救いということについて心得ている人がいかに少ないことであろうか。彼の悩みは激しかった。狭量なドイツ気質よりもまず人間性を尊ぶコスモポリタンとして、また愛を何よりもたたえるヒューマニストとして、どうして周囲の血の愚行に同調することができたであろうか。しかしながら、ここでわれわれの注意をとりわけ強く促すのは、そこに深い内省が伴ったことである。そのような野蛮さを非難する権利は人間にも神にもなく、ましてや自分などにはありようがない、と彼は考える。彼としても、これまで総じて安きに流れ、真の救済への道を敢然と進まなかったことによって、多かれ少なかれ世界のこの混乱と罪とに関わってきた、とするのである。これはヘッセのまことに特徴的な態度だと言わねばならないが、そのことを突き詰めようとして、彼はひたすら自己の内面に、自らの運命の中に沈潜していった。同時にそれは、人類の運命全体にも繋がるものだという思いをしばしば抱きながら、このことと関連して、「ドイツの青年たちに与える言葉」とい

う副題の付いた「ツァラトゥストラの再来」(1919)の中においても(「ドイツ人について」¹²⁾)、ヘッセは青年たちに対して、彼らが自分自身に不実であったためにこそ世界の憎悪を招いたのだということを、予言者にして指導者たるツァラトゥストラの口を藉りて語っている。

さて故国の詩人や芸術家や学者やジャーナリストである友人たちにあてた、先の「おお友よ、そのような調子をやめよ！」という短い文は、当時のドイツにおいて最初は丹念に読まれた。ヘッセのこの真率な呼び掛けはしかし、ヨーロッパ全体が戦争に対し、輝かしい未来への道を開くものとして、まさに酔い痴れている時期に現れたのである。1914年の夏、帝国主義の熱に浮かされたヨーロッパには、その国家的な利権を平和の維持のために制限したり犠牲にしたりすることを欲し、またすることができるような国は、まずなかったと言える。われわれは今日、さまざまな国の兵士たちが、どのように熱狂的な愛国心に燃え立ち「崇高な」使命感に駆られて、この年の8月に戦地に赴いたかを、ほとんど想像することさえ困難であると言ってよい。しかもこの感激は普遍的なもので、一般庶民からインテリ階層にまで広くゆきわたっていた。何十万もの人々が競って軍隊に志願し、すべてのヨーロッパ諸国で多くの作家や思想家たちが、戦争の開始を激越な言葉に寄せて讚美していた。それぞれの国家が、他国に対するこの戦争を完全に正当なものとして信じていたと言える。今ではもはや容易には理解しがたいことでもあるが、大戦の開始は、大多数の人々にとって、長い間の抑圧からの解放のように受けとめられたのである。彼らはもはや、袋小路に入りこんだ論戦を続ける必要もなく、武力をもって華々しく解決する道に就くことができた。武器こそは、山積した問題を一挙に処理すべき手段であった。戦争へのこの病的で快い麻酔をかけられていた少なからぬ数の知識人の中に、当時リルケやトーマス・マンなどまでも含まれていたという事実は、特に注目に値しよう。そのような全体的な狂乱の時代にあっては、ごく少数の例外的な作家たち、つまり、絶対平和を擁護する立

場から反戦の文筆活動を積極的に展開したヘッセやフランスのロマン・ロラン、またこれを支持したオーストリアのシュテファン・ツヴァイクや、ロシアのゴリキーらの声など、もとより人々の耳にまともに入ることは考えられず、ましてや正当に理解されることなど殆んど望むべくもなかった。

ヘッセは常に冷静で明澄な態度を保ち、彼の論文は人間の理性と節度とに訴え続けた。われわれ故郷に愛を寄せ未来に対して絶望したくない者には、一片の平和を保ち、橋を懸け渡し、道を求める仕事を与えられている、これ以上ヨーロッパの将来のための基礎を揺がし、ペンで切り掛かることはやめにしよう、戦争を克服することこそ、われわれのもっとも高貴な目標ではないか、と静かな口調で語ったのである。ヘッセを売国奴だとする誤解の始まるきっかけとなったこの論文も、現在の眼から見ると、高等学校上級学年向けのどの教科書に転載しても適当なものと思われる。これは、極めて格調高くまさに時宜にかなったもので、実は国民的意識の本当の意味での進展に寄与すべき重要なテキストの一つである、と言ってよい。だがヘッセには、その愛読してきた作家から裏切られたと感ずるドイツ国民から、はげしい誹謗と中傷の言葉が殺到した。そのころ敵国フランスにあってヘッセと同じ態度を取っていたロマン・ロランは、ヘッセを充分に理解して深い敬意を払っていたが、この二人の作家の思慮深い良心は、人々の受け容れるところではなかったのである。

戦争の続行する間ヘッセは、ベルンにあるドイツ公使館の委託をうけて、ドイツ人捕虜のための文庫発行の責任者となって奉仕した。そして、その間にあってなお残されている短い自由な時間に、彼は、自分に向かって絶えず寄せられるジャーナリズムの迫害に対処し、自らの態度を冷静、かつ具体的で明確に表明する仕事にと打ち込んだ。

1918年11月に大戦が終わった時、ヘッセは荒廃しつくした世界を前にして立っていた。その文筆の仕事は凄まじく破壊されていた。まだ辛うじて

はいつてくるドイツからの僅かな印税も、貨幣価値の下落によって紙屑同然となり、古い読者層はあらかた彼に背を向け、ヘッセは市民としての収入を殆んど絶たれて、すでに危機を迎えていたその結婚生活にもついに破局が訪れた。

しかしヘッセは、これらのさまざまな出来事によって、政治的に目覚め成熟していった。その見解には、現実に基づいた肉付けが次第に豊かに加わってきた。ただ彼は、政治の世界の実際にはいることは決してなかった。戦後まもなく、バイエルン政府があるポストへの就任を要請してきた時も、ヘッセはきっぱりと拒否した。それは、自己の前歴を分析し、また素質・才能に深く思いを凝らした上で、自分自身がどのような仕事と奉仕に対して、本質的に方向付けられているかということをよく心得ていたからであり、こうして決定された文筆による仕事の一筋道に、可能な限りの精力を集中してひたすら打ち込もうと努めたのであった。

このことと関連して注目されるのは、ヘッセが首尾一貫して、これまで一度として大衆や公共の団体などに呼び掛けを行なったことがなく、ただ一個の人間の内的必然性から発する個人的な決断をのみ、常に求めてきたことである。彼によれば、人間にとって最悪の敵とも称すべきものは、思考の怠惰と休息を求める気持とから、集産的社会へ、また政治的あるいは宗教的にまったく固定した教義を持つ共同社会へと、心が強く傾斜してゆくことである。すべての人間存在は、個性的で他に掛け替えのないものであり、個人の良心の代わりに集団的なものを立てようとするのは、すでに忌むべき暴力の行使で、全体主義への第一歩である。統制は、それがたとえ善意から出たものであっても、結局は狂信と戦争とに通じるものとなる。いかなる形のものであれ、彼はおよそ団体の意思などに決して信頼を置きはしなかった。現存の国の政治家にして、革命や理性や軍備の縮小あるいは廃止などに対して大変に熱心であることは、往々見られる現象に違いないが、それも常に例外なく、ただ敵に向かって望むお題目に過ぎない

ではないか。

このように徹底した考えを持って生きたヘッセにとって、ワイマル共和国は、その成立の当初から懐疑の対象であった。もちろん右翼政党に対して彼が共感を覚えるはずもないが、漸く勢力を拡張してきたナチ党と、とりわけこれを讚美する詩人どもや信奉する数多い学生どもの、病的なユダヤ人排斥には公然と非難し、1920年代の初め彼の家に送りこまれた学生からの憎悪の手紙には、いっさい取り合わなかった。他方また、共和国の、本来は中心的存在たるべき社会民主主義者たちに対しても、彼は何らの敬意も払えなかった。ヘッセの考えによれば、ドイツ社会民主党は、革命の成就に対しても、また革命の崇高であるべき理念を現実の政治に反映させることについても、何らなすところなく、謂わば愚かな肥った相続人として、虐殺されたカール・リープクネヒトなどの屍の上に坐っているのであって、この政党に向けられたヘッセの軽蔑の気持と、彼自身の社会的な思考や感情との間には、まったく関係がないと見るべきである。

ヘッセはただ1度だけ、ドイツのある公共の機関に所属したことがある。1926年に、プロイセン芸術アカデミーの文学部門の会員に選ばれたのである。しかし、その空気を耐えがたいものと感じた彼は、これを応諾したことをすぐに悔んだ。彼にとってこのアカデミーは、もしも次の戦争が起こるようなことがあれば、またしても1914年の時のように、国の命令で、あらゆる重要な問題について嘘を吐く著名人たちの一大集団を作ること大いに寄与するだろう、と思われたのである。そして1931年にはついにこのアカデミーを脱退するのだが、やはりそこには、最終的な理由として、ワイマル共和国に対するヘッセの強い不信の念があげられる。彼によれば、この戦後の荒廃の中から生まれた共和国は、当初から不安定で活気がなく、いわゆる革命のすぐれた数人の担い手はやがて殺害されたが、官吏は無関心で、民衆もまた極めて幼稚であり、この蛮行もその殆んどすべての者によって是認されるような有様であった。ドイツは独自の革命の形式

を見いだすことができず、共和国の未来にかけようとした彼の希望は、すでにその最初の段階から打ち砕かれてしまった。大部分のドイツ人が、戦争責任にも、またヴェルサイユ条約にも精神的にいっこう関知せず、ヘッセは、あの大戦中と同じ程度に、自分の心が、ドイツ全体を支配しているメンタリティーと隔絶しているのを感じ、その気持ちをはげしく左へと駆り立てられるのであった。

ヘッセはドイツの社会民主主義者たちに対し、1918年の「革命」への背反行為を攻撃した。そして、共産主義の思想的立場を正当かつ当然のものと考え、われわれが仮にすべてそれに対して反対することがあろうとも、共産思想は結局は堂々とやってきて勝利をおさめるだろうと見ていた彼は、資本主義的な社会秩序を明確に敵ととなえた。しかし、マルクスとトロツキーとを真剣に読んだ彼は、それにもかかわらず現実の共産主義の同調者にはついに成り得なかった。スターリン主義の中に、また共産党のボス支配において、本来のマルクシズムの墮落を見落しなかつたヘッセは、これに向かって明らかな拒否の態度を示し、そして詩人たちに対する共産党の扱いについては、特に大きな疑念を隠さなかつた。ヘッセの見るところによれば、共産主義者にとって詩人は一つの道具であり、その折々の支配階級が、宣伝に恰好な才能といった意味で勝手に利用できるものだ、などと彼らは考えている。しかし、そのような意図に奉仕する用意があるのは、まさに無価値な連中のみで、真の芸術家や詩人は常に自主独立への抑えがたい衝動を抱き、ただ自己の良心にのみ従って仕事を行なうのであり、彼らはその用いかたを誤られるよりは、むしろ死を選ぶのを潔しとするのである。

繰り返しになるけれども、詩人の使命をこのように強く自覚しこれを守り通そうとしたヘッセが、ましてヒトラーに同調し得ないことには贅言を要しないであろう。第二次大戦が避けられないことを、ヘッセはすでに、1927年に発表した小説「荒野の狼」の中で予言していた。さきほど終わっ

たばかりの大戦に引き続き、もう早くも来たるべき新しい戦争の準備に狂奔する人類の、極度の錯乱状態を洞察して、時代の狂気と病患をあくまで回避することなく、これを剔出することによって克服しようとした。彼本来の抑制した筆致ながら、そこには、未来に眼を開いた詩人の時代意識の鋭さが明白に読み取れるのである。そして1933年にヒトラーが政権を掌握したのちは、ヘッセにとって、この突然ふたたび昇りつめたドイツの「偉大さ」が、1914年のあの国民的な感激を想起させ、来たるべき戦争の開始は、さらにその不可避性を確信されるに至った。

ヘッセはスイスにあって、ドイツの亡命者たちのために援助の手を差し伸べて活動しようと試み、また外国人に対しての監視機関である外事警察に積極的に働きかけようと努めたのだが、これは彼の立場では、ナチスに反対する抵抗の精一杯の表われであった。だが、この亡命者たちをも、彼はまもなく敵とすることになってしまった。彼らは愚かしくも、ヘッセの態度を非難した。というのも、ナチスへの反抗を公然と宣言することを彼が拒絶したからである。第二次大戦の開始とともに、ドイツではヘッセの本に対していっさい紙の割り当てがなくなったので、実際上は出版停止も同じことであったが、しかしながら、これまでその著作が法令の適用で禁止されたり焼き払われたことは、まだ1度もないのであった。1941年以後は、彼の書物はただスイスにおいてのみ刊行可能ということになったが、上述の事情により、ヘッセにとっては、まだ出版禁止令が出ていない間は、ドイツになお存する限りの自分の本によって、可能な範囲内でナチスの暴虐に歯向かい、またナチスの手で極度の危険に曝されているヘッセ従来のドイツにおける出版社主ズールカンプ氏に、これ以上に不必要な迷惑をかけないということのほうが、更に重要だと思われたのである。

1945年に大戦が終わったのち、政治的な問題に関しては、ヘッセはただもう1度だけ所思を公けにしたことがある。そのきっかけを与えたのは、またしても新しい戦争、つまり朝鮮戦争であった。ヘッセによれば、大国

の指導者や将軍どもは、今回の大戦によって何一つ学ぶところがなかったし、また何一つ学ぼうともしない。大国は、1945年にその空しいいわゆる勝利なるものを手に収めたあと、世界平和を打ち樹てるための本当の努力は殆んど全く行なわなかったが、その代わり、戦争を新しく可能にするためには、あらゆる力を傾注して惜しむところがなかった。このような指導者や将軍はもとより、さらに、最後まで爆弾の製造に力を藉している物理学者たちもまた、まさしく平和ならびに人類の敵なのである。そしてさらに、大国の国民一般に瀰漫する冷戦のヒステリックな群衆心理的昂奮も、厳に誡めねばならない。それはただ、戦争を平和よりもよい仕事だと考える連中に利するだけである。

1950年に宣明されたこの見解に対しては、ふたたびその反動として、西ドイツから例の激しい憤りと敵意の汐が押し寄せ、また東ドイツにおいては、純粋に人間的で理性的な、あくまで自己自身に忠実であり続けようとする彼の考えが、スターリニズムへの告白へと摩り替えられてしまうのであった。そしてこの類いのことは、いかなる党派にも属さずまたいかなる権力にも関与しないヘッセのような存在が、そのためにこそ過去、現在を通じて常に味わう経験に他ならない。しかもヘッセは、この不偏不党・独立独行の姿勢を終生ついに崩さなかった。西ドイツ学士院の遠隔地会員にも、また東ドイツのその名誉会員にもなることを欲しなかった彼は、ドイツのある学士院会員に1951年またしても選ばれそうになった時、さきのプロイセンでの経験に懲りて、それを前もって強く拒否したのであった。今回は東ドイツからの「名誉授与」の件であったが、ヘッセの考えによると、これは何も、人々が東ドイツにおいて、彼を適わしく評価しようという真意に基づいて行なわれることなどではない。その実際の意図は、一つには、或る著名な作家の名前を宣伝のために利用しようというのであり、また第二には、本来の環境におけるその作家の存在を抹殺しようとするものである。このように、ヘッセには現象の本質があまりにもよく見通せず

ぎるのであった。彼は謂わば群羊中の老いた狼のごとく、また濁り切った現実の大海の中に、西ならびに東の撒く餌に取り囲まれつつ、しかも全くそれらに食い付くこともなく、自己のペースでただ泳ぎ続けていった。

さて、ここまでしばらく政治的人間としてのヘッセについて眺めてきたわけだが、Siegfried Unseld（現在 ズールカンプ 社の社長）によって選びまとめられたヘッセの「政治論集」（„Politische Betrachtungen“）が、ズールカンプ叢書の一つとして1970年の春から出版されている。また同じ頃に同社からヘッセの「文学論集」（„Schriften zur Literatur“）2巻も出たが、これらはいずれも、先に述べた12巻の *Gesammelte Werke* の中にも収められた。これらの論文のすべてを注意深く読む者は、ヘッセという作家をおそらく正当に評価できるであろう。ドイツにおける真摯なヘッセ研究家をして、自分らはこれまでは多少とも変わり種だと言わしめ、ドイツの大学の講義や演習のテーマとして彼の扱われることが現在あまりにも少ないという事情には、大いに検討を要するであろう。

ヘッセに対する偏見発生の次第については、これまでも既に何ほどか述べてきたが、それらに更に加うるに、第二次大戦後ほどなくして、一つの奇妙な事件の持ちあがったことも考え合わされる。それは、オーストリアのジャーナリスチックな文筆家で Hans Habe と名乗る若い Hans Bekessy なる人物が、ヘッセのことを、今日のドイツで、なお作家として文学的な何らかの役割を果たす値打ちなどない、と極めつけたことである。もっともヘッセは、この男が、前代の海賊的な赤新聞のジャーナリストで同じくベーケーシを称する人物の、息子であることを知っており、この愚かしくも僭越な言葉を、まともに取り合うことなど決してなかったのであるが。

誤解を生むヘッセ像を広めたことについては、数年前の雑誌「シュピーゲル」に掲載されたある論文のことなども想起される。つまり、そこではヘッセは、自己と自己の夢や不安とにのみひたすら関わっている神経質な

浪漫主義者で、道士然としてひそかに神秘の術に耽って、夢想家どもの一団を取り巻きとしてその周囲に集めつつ、集団式家庭菜園での仕事を趣味としているような人物なのである。そしてこのような作家は、たとえ人間として尊敬に値するところを多少とも備えていたところで、文学に深い関係を持つ者にとっては、せいぜいのところ二・三流の作家にすぎず、他の者を措いてこれと何よりも真剣に取り組むことなど、到底考えられるものではないと言う。

しかし、このような既成観念に基づく謬見がいつまでも続くものでないことを、私は心から信じたい。そして、そのための地味な努力を撓まず続けているドイツの研究者・評論家も、数少なくないことを私は知っているが、ズールカンプ社の若手の編集者 Volker Michels 氏もその一人である。この人は、最近まことに精力的に、次々とヘッセ関係の原典や参考文献・資料の編集と刊行を行なっているが、1966年にヘッセの未亡人ニノンが出した、1877年から1895年にわたるヘッセおよびその周辺の人々の手紙その他の生活記録集¹³⁾に続いて、その後におけるヘッセの書簡集3巻の出版も、彼の責任に委ねられている。そのうちの第1巻はすでにズールカンプから出た¹⁴⁾が、いまもこの龐大な量にのぼる手紙の整理を続けているミヒェルス氏の、ヘッセにかける情熱は激しく、ドイツ語圏におけるこの詩人の受容の事情について分析し、これを矯正すべく全力を揮っているのである。すでに触れたように、ドイツにおけるヘッセの受容の変遷、その「人気」の消長の様は特異と言うべく、またアカデミズムやジャーナリズムの世界にそれがとりわけ顕著に現われているのは、眼をひく現象である。それらにおける評価と、ヘッセと等質の才能を持っていると考えられる彼の同時代人たち、たとえばベンヤミン、ブレヒト、デーブリーン、フロイト、ハントケ、ツェー・ゲー・ユング、カフカ、トーマス・マン、トゥホルスキー、ジッド、ヘンリー・ミラー、ワイルダーなどの批評と美事に一致する折々の若い世代の、彼に寄せる共鳴との間の不調和は、一体

どうしたことか。ヘッセが終始変わることなく、作品を通してまさに個々の人間の自我の本質に呼び掛けてきたことに、彼が今日の若者たちの間にあのように大きな反響を起こしている決定的な理由があると思うが、それらの賛意と深い感歎の声を一笑に付そうとするのは、理に悖るものと考えざるを得ない。

しかしドイツでも、ヘッセの最近の12巻の「全集」はすでに何十万部からの売れ行きを見せており、先述のマンとの往復書簡集に引き続き、とりわけその政治的な論文などを足掛かりとして、漸く真率な検討の気運も少しずつ出てきたことは、確かなようにも受け取れる。かつてトーマス・マンをして、「デーミアン」について、第一次大戦直後にこの作品の与えた烈しい衝撃の忘れがたいことを述べしめ、またベンヤミンに、その眼は神秘家の瞑想とアメリカ人の持つ炯眼との間の独自の中心に位置している、と語らせたこの詩人の真価も、その死後10年以上を経てやっと問われ始めたかに見える。私自身は、年とともに、ヘッセという作家は仲々一筋縄では行かないという気持ちを深めているが、未整理、未刊の資料もあまりに多く、その全貌の解明は、まだまだこれから先の仕事である。ドイツでも、ヘッセを知り彼を尊重する人々の一様の歎きが、ヘッセが残すものを曇らぬ眼で読み通されたことが、今まではあまりにも少なすぎることであった。トーマス・マンに、上記「デーミアン」に関して、「まさに不気味な正確さで時代の神経を捉え、すべての青年に、かれらの中心からその最も奥深い生命の告知者が生まれ出た——この彼らが必要とするものを与えた人は、すでに40才になっていたのだが——として、感謝の坩堝に巻き込んだ」¹⁵⁾と述べさせたヘッセが、雑文家というような低い評価の対象にとどまってよいわけは決してない。

注

- 1) in „Vorrede eines Dichters zu seinen ausgewählten Werken“ (Hermann Hesses Gesammelte Werke in zwölf Bänden, Suhrkamp, 1970, Bd. 11, S.

- 7-12).
- 2) *ibid.* S. 9.
 - 3) 金沢大学法文学部論集・文学篇3 (1955年) 所載, 拙稿「<デーミアン>の、ヘッセにおける意義」参照。
 - 4) Karlheinz Deschner : *Kitsch, Konvention und Kunst*. List Taschenbücher, 93, 1965.
 - 5) Friedrich Sieburg in „Frankfurter Allgemeine Zeitung“ vom 12. 10. 1957. („Nutzen und Schaden der Vereinfachung“)
„Der Spiegel“, Hamburg, vom 20. 11. 1957. („Der Blütenleser“)
Günther Weidle in „Stuttgarter Zeitung“ vom 23. 11. 1957. („Eine Lanze für Deschner“)
Jürgen Eyssen in „Bücherei und Bildung“, Reutlingen, Mai 1958. *usw.*
 - 6) Christian J. Schneider : *Das Todesproblem bei Hermann Hesse*, 1973. (Maschinenschrift)
 - 7) Dr. Gerhard Kirchhoff, Volker Michels *usw.*
 - 8) „Der Briefwechsel Hermann Hesse - Thomas Mann“, hrsg. von Anni Carlsson, Suhrkamp, 1968.
 - 9) „Krieg und Frieden. Betrachtungen zu Krieg und Politik seit dem Jahr 1914 von Hermann Hesse“, Suhrkamp.
 - 10) „O Freunde, nicht diese Töne!“ (Hesses GW, Bd. 10, S. 411—416.)
 - 11) „Kurzgefaßter Lebenslauf“. (Hesses GW, Bd. 6, S. 391—411.)
 - 12) „Vom Deutschen“ in „Zarathustras Wiederkehr“. (Hesses GW, Bd. 10, S. 491—493.)
 - 13) „Kindheit und Jugend vor Neunzehnhundert, Hermann Hesse in Briefen und Lebenszeugnissen 1877—1895“, ausgewählt u. herausgegeben von Ninon Hesse, Suhrkamp, 1966.
 - 14) „Hermann Hesse, Gesammelte Briefe“, Erster Band 1895—1921, in Zusammenarbeit mit Heiner Hesse, hrsg. von Ursula u. Volker Michels, Suhrkamp, 1973.
 - 15) „Demian“. (Hesses GW, Bd. 11, S. 32.)

本文ならびに<注>において挙げたものの他に、数多いテキスト・参考文献のうち、本稿の執筆に当たって直接に参照、利用した主なもののみ、以下に列挙する。ただし煩を避けるため、Hermann Hesse は H.H. と略記した。

Allemann, Beda : An H.H. zu seinem achzigsten Geburtstag. (=Sonderabdruck aus „Schweizer Monatshefte“, 37 Jg., Heft 4, Juli 1957.)

Benn, Gottfried : *Doppelleben. Zwei Selbstdarstellungen* (von 1934 bis

1950). Wiesbaden 1950.

Bentz, Hans W.: H.H. in Übersetzungen. Hans W. Bentz, Ffm., 1965.

Gide, André: Zu H.H. Vorwort zur französischen Ausgabe der „Morgenlandfahrt“ in deutscher Übersetzung. (Aus: „Morgenblatt für Freunde der Literatur“, Nr. 10, zum 80. Geburtstag von H.H., 2. Juli 1957.)

Kirchhoff, Gerhard: H.H. und unsere Zeit. Vortrag in der Goethe-Gesellschaft von Südastralien, gehalten am 16. Nov. 1966 in Adelaide. (Manuskript.)

Kirchhoff, Gerhard: H.H. heute. Anlässlich der Werk-Ausgabe in der edition suhrkamp. 1970. (Maschinenschrift.)

Kleßmann, Eckart: H.H. (Aus: „Zeit Magazin“, Nr. 15, 14. Apr. 1972, S. 4-11.)

Lüthi, Hans Jürg: H.H. Natur und Geist. Kohlhammer, 1970.

Michels, Volker: Hesse in den USA — Hesse bei uns. (=Westermann Monatsmagazin, „Welt, Kunst, Kultur“, Nr. 5, 1971.)

Michels Volker: H.H., der distanzierte Deutsche. Bibliographische Daten, Anhang (S. 315—339), Ffm., Febr. 1972.

Michels, Volker: Will und billige ich die Revolution? Nachlaß und Nachwirkungen HH's. (Aus: „Frankfurter Allgemeine Zeitung“, Nr. 197 vom 26. Aug. 1972.)

Michels, Volker: Materialien zu HH's „Der Steppenwolf“, Suhrkamp, 1972.

Pfeifer, Martin: Narziß und Goldmund. (=Wilhelm Königs Erläuterungen zu den Klassikern, Bd. 86.)

Rose, Ernst: Faith from the Abyss. HH's Way from Romanticism to Modernity. New York Univ. Press, 1965.

Ruprecht, Erich: Wendung zum Geist. Gedanken zu HH's „Glasperlenspiel“. (Aus: „Die Botschaft der Dichter“, zwölf Vorträge, von E. Ruprecht, Verl. Dr. Roland Schwindel, Stuttgart, 1947.)

Schulz, Klaus: Aus deutscher Vergangenheit, von 1914 bis zur Gegenwart. Max Hueber, 1963.

Schwarz, Georg: Ist H.H. sentimental? — Brief an einen seiner Verächter. (Aus: „Welt und Wort“, 24 Jg., 1969, S. 367—368.)

Unsel, Siegfried: H.H. zum Gedächtnis. Suhrkamp, 1962. (Privatdruck.)

Ziolkowski, Theodore: H.H. and Novalis. Diss., Yale Univ., 1956.

Ziolkowski, Theodore: The Novels of H.H. A Study in Theme and Structure. Princeton Univ. Press, New Jersey, 1965.

Ziolkowski, Theodore: H.H. New York Columbia Univ. Press, 1969.

Zur neuen Bewertung Hermann Hesses

Hiroyuki Fujii

Der Name des Dichters Hermann Hesse drängte sich in seinem Leben dreimal in den Vordergrund: beim Erscheinen seines ersten Erfolgsbuchs „Peter Camenzind“ (1904), bei der Veröffentlichung seines „Demian“, der nach dem ersten Weltkrieg größtes Aufsehen erregte, und bei seiner Verleihung des Nobelpreises (1946). Sein Ruf unterlag aber bislang einem stetigen Wandel.

Im Jahre 1957 kritisierte Karlheinz Deschner Hesses Werke in seiner sensationell aufgemachten literarischen Streitschrift „Kitsch, Konvention und Kunst“, vorwiegend bezüglich der Ausdrucksweise und erklärte sie meist für epigonenhaft. Diese Mißbilligung trug wohl ziemlich viel dazu bei, daß man über Hesse abschätzig urteilte. Seit dieser Zeit spätestens sind viele Intellektuelle in der Bundesrepublik leicht dazu geneigt, ihn ausdrücklich geringzuschätzen.

Merkwürdigerweise kam es dann in den USA um 1960 herum unerwartet zum Ausbruch einer recht auffälligen jugendlichen „germanisierenden“ Bewegung, und dabei war gerade der Dichter Hesse, den man in Deutschland als apolitisch und unschöpferisch bezeichnet hatte, nichts anderes als ein Götze für die amerikanische Jugend. Außerdem hielten Literarhistoriker dort auch den Hesseschen schlichten Stil für einen höchst komplexen, der eigentlich von der inneren Fülle herkomme, und bewerteten den Autor

besonders hoch. Diese „Hesse-Renaissance“ in Amerika dehnte sich seither allmählich über andere Länder bis nach Europa aus.

In der Bundesrepublik (und auch in den anderen deutschsprachigen Ländern) aber scheint es im allgemeinen noch nicht so weit gekommen zu sein, daß man bereit ist, einen wesentlich „veränderten“ Hesse anzunehmen, obgleich nun die neue Welle auch dort nach und nach ihre Wirkung tut wegen seiner kürzlich nacheinander erschienenen wichtigen Schriften, vor allem „Briefwechsel Hermann Hesse - Thomas Mann“, „Politische Betrachtungen“ und „Schriften zur Literatur“, usw. und dank aller Bemühungen ernsthafter und unnachgiebiger Hesse-Kenner.

Der 1914 begonnene Weltkrieg machte Hesse politisch reif, und dieser überzeugte kriegsgegnerische Schriftsteller war ausschließlich in seine Innenwelt und sein eigenes Schicksal hinein vertieft. Aber eben zu diesem Zeitpunkt wurde der Anlaß zu dem Mißverständnis gegeben, ihn für einen fluchwürdigen Vaterlandsverräter zu halten. Er fühlte sich andererseits nicht zum Appell an die breiten Massen, sondern immer nur an das innerste Wesen der Einzelpersonlichkeit berufen und beteiligte sich niemals an wirklichen politischen Bewegungen. Er war von der Weimarer Republik auch enttäuscht und hatte dann bei Hitlers Machtübernahme schlimmste Vorahnungen für die Zukunft Deutschlands, und dennoch blieb er nach seinem eigenen Glauben doch unparteiisch und unabhängig von allem und wollte immer noch nicht in die politische Laufbahn eintreten. So wurde er sowohl von der Rechten als auch von der Linken heftig verleumdet und geschmäht. Nach dem zweiten Weltkrieg überhäufte er beim

Koreakrieg diesmal große Siegerstaaten wiederum mit Vorwürfen. Darüber ärgerte man sich in der BRD sehr, und beim Volk in der DDR kamen manche absichtlich irreleitenden Meinungen über ihn in Umlauf.

Mit dem Wandel der Hesse-Kritik wird dieser politische Hintergrund auch sicher nicht wenig zu tun haben. Ich bin selbst immer fester davon überzeugt, daß er sich überhaupt nicht so leicht fangen läßt. Man müßte nun gründlich untersuchen, warum sich manche Hesse-Freunde in Deutschland, die ihm die Treue bewahren, ironisch etwa „komische Käuze“ nennen und warum er besonders von Akademikern noch immer sehr oft nicht ernst genommen wird.

Es ist erfreulich, daß seit kurzem eine Arbeit, eine ungeheure Anzahl Briefe von ihm zusammenzustellen, gefördert wird und daß der erste Band der geplanten Briefsammlung in drei Bänden dieses Jahr (1973) schon im Suhrkamp Verlag erschienen ist. Es gibt noch sehr viele unveröffentlichte oder ungeordnete Primärliteratur von ihm, und der Aufschluß über sein genaues Bild ist alles andere als gegeben. Den wahren Wert dieses Dichters begann man anscheinend erst 10 Jahre nach seinem Tode anzuerkennen. Es bedarf wohl keiner überflüssigen Worte, daß man sein ganzes Schrifftum erneut mit ungetrübten Augen auf seinen Wert untersuchen muß.